

奄美の伝統染色

片岸博子

1. はじめに

本研究は平成17年度から2ヵ年計画で行ってきた地研の個人研究プロジェクトである。

研究の目的は、一つには、大島紬の染色の中でもっとも特徴的な泥染めの現地調査と、現行の技法と江戸時代の染色技法書に記載された技法との比較検討であり、もうひとつ大きな問題は、明治中期以降に非常な発展をみる大島紬の源流の確認である。後者の問題の解決は、直接の歴史資料が皆無に等しく非常に困難で、未だ結論を得るに至っていないが、琉球の上布の染織の歴史が先行するのではないかという感触は得ている。

本稿は、平成17年度末に実施した現地調査の報告である。

調査は平成18年3月13日から15日の3日間名瀬市（現奄美市）で行った。

まず、鹿児島県大島紬技術指導センターを訪ね、染色化学研究室主任研究員の山下宜良氏から、センター内の諸施設を見学させていただいたのち、大島紬の泥染めについて話を伺った。その後、市内の有村織物（有）で織工場見学、大島紬会館の見学を山下氏の案内の下に実施した。

第二日目は、本場奄美大島紬泥染公園において、伝統工芸士の野崎松夫氏の指導で、シャリンバイの泥染めによるスカーフの染色を行った。

第三日目は、名瀬市立奄美博物館の染織資料見学、奄美パーク田中一村記念美術館見学で全ての日程を終えた。

2. 染色技法の比較

日程に沿って、山下氏から得た現行の染色技法と江戸時代の染色技法書に記載された技法の比較から記す。

(1) 泥染めについて

細かい緋織物である大島紬は、経糸または緯糸になる絹糸を、木綿糸を経糸に使用して緋締機で仮織りし、筵状に織りあがったものをシャリンバイで染めた後、泥染めする。これは、泥の中に含まれる鉄分を利用したタンニン酸の鉄媒染で、回数を経るほどに黒さを増す黒染めの一方法である。

タンニン酸を多く含む植物の煎汁で染めたのち鉄媒染することで黒を染め出す技法は、江戸時代の染色技法書にも多く見られるし、黒い衣服が平安中期以降の服制のなかで大きな位置を占めていた事実や、お歯黒という風習が古くからあることを考えると、この技法による黒染めの歴史は古い。

しかし、鉄媒染による黒は、染布の脆化が避けられず、美術館や博物館に展示される染織遺品にも、黒染め部分だけがぼろぼろになっている例が多く見受けられる。

また、江戸時代後期の染色技法書である『染物重宝記』の「○黒の部ならびに品ある事」¹⁾の項には、「おはぐろ。砥汁。ろうは。どろ染類八大に地損ずる。」と記され、それを防止す

るための方法として、「下染花色にして染れば随分つよし。」と記されており、江戸時代の人々が、経験則から鉄媒染による黒染めが生地を傷めることを認識しており、防止策として、藍で花色になるまで下染めしたのち黒染めすることを推奨していることが分かる。

『染物重宝記』に書かれているこの二点に関して、専門家である山下氏の意見を伺った。

泥染めが地を傷めるということに関しては、確かに未染のものに比べると強度・伸度が少し低下するが、問題になるほどのものではないとのことであった。

筆者は以前からこの点に関して、染色後年月の経過とともに鉄分が空気中の酸素で酸化することによって生地を傷めるのではないかと考えてきた。²⁾このことについても意見を求めたが、そのような実験をしていないので分からないとの答えであった。

泥染めするにもかかわらず、大島紬は親から子へ何代も着続けられるというほど丈夫でもあると言われているが、これについては、「泥染めするしないに関わらず、絹織物は脆化するのだから、そう何代も着続けられるものではない。」ということである。

(2) 藍下染めののち黒染めすることについて

前述の『染物重宝記』に、黒染めが生地を傷めることを防止するために藍下染めすると書かれていることを実践するかのように、江戸時代のあらゆる染色技法書の黒染めの法には、藍下染めの例が多い。『染物重宝記』よりずっと早い江戸前期の成立である『万染物張物相伝』や『当世染物鑑』、『万宝鄙事記』にも見られるところから、かなり古くから行われた染色法であると思われる。

この点については、大島紬の染色においては、先に藍染めするのはコスト軽減のためであって、あまり行われなない。すなわち、シャリンバイの泥染めによる黒は赤みがちなので、藍下染めすると青黒くなり泥染めの回数が少なくて済むのだという。

大島紬の染色において、シャリンバイ染めは、まず染布に高濃度の石灰液をもみこむ。石灰媒染で赤茶色に発色させてから泥染めするのである。したがって、藍下染めされていると、石灰のアルカリで藍が還元されて浮く、つまり藍が色落ちするのだそうである。

江戸時代の染色技法書の黒染めにシャリンバイを使用した例は皆無である。タンニン酸を含む染料としては、楊梅皮(モモカワ・ヤマモモ)・五倍子(フシ)・檳榔子(ピンロウジ)・梅皮などが使用され、鉄媒染の材料としては、鉄漿・砥汁・泥・緑礬などが使用されている。藍下染めした黒染めに石灰を併用する例は見当たらない。

茶色の染色には、楊梅皮や梅汁に石灰と鉄漿を併用する例は非常に多いが、その場合は藍下染めしていない。当時の人々は経験則として知っていたのであろう。

(3) 光沢や風合いについて

これは江戸時代の染色技法書には書かれていることではないが、大島紬の場合、泥染めをすると光沢が増し風合いが良くなるといわれるが、真偽のほどを伺った。

シャリンバイで染め石灰を揉みこんで乾燥させると、針金のようにピンとなるが、これを泥染めするとラミネートコーティングしたように柔らかくなるのだそうである。理由はまだ解明されていないという。

適度な張りとうるみのある独特なシャリ感と軽さと光沢は、大島紬の身上とするところである。

(4) 泥染めを踏襲する理由

鉄分を好むソテツが育つ環境なので鉄分の豊富な土壌なのかと思って質問したが、答え

は意外にも、鹿児島のと成分比較したが、差はあまりなかったということである。

赤土は酸化鉄を含んでいるので赤っぽい色を呈しているわけで、これはどこにでもある。しかしこれを水に溶かしただけでは泥染めはできない。泥田の中の微生物の還元力のおかげで泥染めが可能になる。実際、泥田はサツマイモやその蔓などを入れるとよく染まる泥田になるという。これらは微生物の養分になっており、養分を補給することによって微生物が活性化するのであろう。

気候と水、深い山など、多様な要素が絡み合って、泥染めが続けられる環境になっているのであろうとの答えであった。

(5) 八丈島の黒紬との技術的関連性

大島紬の源流を探る作業の中で、「八丈嶋紬」の名称が江戸時代初期に確認でき、そのうちの黒染めが泥によるものであるところから、海のルートでの技法伝播の可能性を感じているので、山下氏は歴史的な研究者ではないが質問してみた。答えは、染め方が違うのではないかと、泥に長く浸けておくと思うというものであった。

『伊豆七島風土細覧』（1800年）には、「黒は椎の木皮にて二十遍ばかり染て田の泥を以て黒色に留る」³⁾とのみ書かれるだけで、詳細は不明であるが、今に残る技法では、田に浸けしばらくねかせておくようである。

3. 泥染め体験

二日目、本場大島紬泥染公園において、野崎氏の指導の下に泥染めを体験した。泥染公園の場所は、旧名瀬市の南郊外、伊津部勝というところでほぼ山の中という感じである。

園内には数箇所に分かれた泥田があり、工房にはテーチ木（シャリンバイ）を煎じるための巨大な釜が設置され、使用量によって数日あるいは数週間ごとに大量の煎汁を作る。

施設は市のもので、野崎氏は夫妻で管理兼指導する市職員のような身分だという。他に3人の若い職人さんがおり、彼らは業者から委託された緋堊の染色を行っていた。

染色体験は有料（3000円）で、被染物を持ち込めばそれだけで泥染めを体験できる。筆者は大小2枚の未染の絹スカーフを買い求め、小さいほうをグレイッシュピンクと薄グレーに、大きいほうを薄グレーと黒に染め分けることとした。

染料で汚れても構わない服装で臨んだのであるが、さらに上に着るトレーナーとズボンと長靴を借りることになった。

なお使用するシャリンバイ煎汁はすでに石灰を混じた複合液である。

江戸時代、赤みの茶色染色に、梅煎汁に石灰を混じた「立梅」と呼ばれる染液を使用した例が多く見られるが、当工房で使用するシャリンバイ液も、同様に染料と媒染剤を混合したもので、赤み茶色の染色に効果的なものとして使用されているのであろう。

染色手順

1) 薄グレーに染める

- ① 熱湯で地入れする
- ② シャリンバイ煎汁 1回
- ③ 石灰水溶液 1回

- ④シャリンバイ煎汁 (液を変えて) 3回
- ⑤②～④を繰り返す 3回
- ⑥泥染め (1回ごとによくすすいで) 3回
- 2) 薄グレーに残す部分を硬く縛りビニール袋に入れる
- 3) 黒染めをする
 - ①1) の②～⑥をさらに3回繰り返す
 - ②シャリンバイ煎汁と泥中の鉄分の混じった液を濃縮した液で煮染めすること5分間
 - ③泥染め 3～4回
 - ④1) の②～⑥を1回
 - ⑤②の煮染めを3分間
 - ⑥泥染め 3回
 - ⑦よく水洗いしたのち防染を解きもう一度水洗いする
 - ⑧乾燥
- 4) ピンクに染める
 - ①2) ののち, 1) の②～④を2～3回繰り返す
 - ②よく水洗いしたのち防染を解きもう一度水洗い
 - ③乾燥

以上のように、真っ黒に染めるには膨大な回数の染色を繰り返すことになる。朝9時から始め、黒染めが完了したのは午後2時過ぎで、5時間ちかい工程であった。

染色結果は、予想以上に良い色に上がった。ピンクも薄グレーに染めてからシャリンバイで染めるので渋いオールドローズのようである。

後日、標準色票で比色測定をしたところ、以下のようなマンセル値であった。

スカーフ (小) ピンク : 2.5R 4/1

薄グレー : 2.5R 5/1

スカーフ (大) 薄グレー : 2.5YR 5.5/1

黒 : 2.5YR 2/1

大小ともに薄グレーまでは同様の染色であったが、生地の織組織の違いで、微妙に色が違うように見える結果となった。

4. 奄美博物館見学

あまり観覧者がなくひっそり閑とした博物館で、船や民具や動物の剥製や貝ばかりかと思っていたが、なかなか素晴らしい染織資料が揃っていた。もっとも興味深かったものは、紋織りのサチで、これは茂野幽考氏が、『奄美染織史』⁴⁾のなかで、徳之島の旧家で見つかった領巾 (ひれ) と紹介しているものに酷似した染織品である。

館員からあまり詳しい説明は聞けなかったが、ノロの人からの寄贈である由、おそらく同様の物が結構各地に残されているのであろう。

5. まとめ

江戸時代の染色と大島紬の染色の技法について、県大島紬技術指導センターの主任研究員山下宜良氏へのインタビューと、泥染公園での実体験を通して、違いや共通性を確認した。

天然染料染色に関しては、まだ科学的に解明されていない点も多いが、伝統工芸技術という観点からは、より合理的に改良しつつ継承されることが望まれる。明治後期に緋締機が発明され、これが大島紬独自の技術として発展し今日に至っていることがその好例であろう。

センターでは、IT技術を導入したカードレス締め機や全自動シャリンバイ染色装置などが開発され、種々の実験が行われているようである。

センターや大島紬会館では若い技術者養成の任も担っており、大島紬会館を見学した翌日とその卒業式だとかで、予行練習中であった。

専門領域を逸脱するような質問にも対応していただき、センター内のみならず、市内各所の紬関連施設へもご案内いただいた山下氏に深く感謝したい。

《引用文献》

- 1) 後藤捷一・山川隆平『染料植物譜』はくおう社 pp.775~776 (1972)
- 2) 拙稿『『染物重宝記』にみる茶色の分類と色上げ染直し』日本服飾学会誌 第19号 pp.99~105
- 3) 『伊豆七島風土細覧』日本庶民生活史料集成 第1巻 三一書房 p.648 (1968)
- 4) 茂野幽考『奄美染織史』奄美文化研究所 pp.41~43 (1973)